

受苦日 過ぎ越しの小羊はすでにほふられた

今日は、イエス様が十字架に架けられて、亡くなられたことを記念するために、10時から十字架の道行きを行いました。今、また、これから、聖金曜日の礼拝を行なうわけですが、しばらく、イエス様が十字架に架けられたことの意味を考えることにしたいと思います。

昔々、イエス様が生まれるよりもずっと昔のお話です。エルサレムから南西に約300キロ離れた所。エジプトという国に、とても強い王様がいました。王様のことをファラオと呼ぶのですが、そのファラオは自分の力を誇るために、エジプトのあちこちに、自分の姿に似た大きな像を建てたり、鳥の顔をしたり、きつねの顔をした神様の像やそれを祭るための大きな神殿を建てていました。その頃にはもうピラミッドはあったのですが、神殿には上の方がピラミッドの形をした、四角いオベリスクという柱を立てていました。それらの工事のためには、たくさんの石を運んだり、レンガを焼いたりする人が必要でした。

そこで、王様は、外国からエジプトに来て住んでいる、ヘブライ人と呼ばれる人々を奴隷として働かせていました。この人たちは、毎日毎日、エジプト人の工事監督の厳しい命令に従って、石を切り出して、引っ張ったり、レンガを焼いたりして、苦しい生活をしていました。

「こんな苦しい生活をしなくていいように、私たちを奴隷ではなく、自由な人間にしてください。」とヘブライ人は熱心に祈り続けていました。そして、そのお祈りが聞かれて、神様は、モーセという立派な指導者を送ってくださったのです。

モーセは、エジプトの中心を流れる、ナイル川を真っ赤な血に変えたり、カエルやイナゴを大発生させたり、天からヒョウを降らせたりして、エジプトの王様を悩ませたのですが、心がかたくななファラオは、なかなか奴隷を自由にしてやる、とは言ってくれません。

そこで、最後の手段をとることにしました。

エジプトで、最初に生まれた人間は、王様の子であろうと、奴隷の子であろうと、みんな殺されてしまうような、恐ろしい出来事を神様は起こして、王様を困らせることにしたのです。でも、ヘブライ人には、その災いがおこらないように、次のように命じられました。

『今月の10日、それぞれの家では、一歳の雄の小羊を用意しなさい。そして14日までそれを生かしておき、14日の午後に、その羊を殺しなさい。そして、その羊の血を採って、それぞれの家の入り口の二本の柱と鴨居に、その血を塗りなさい。』

『そしてその夜は、殺した羊を丸ごと火で焼いて、それと一緒に、膨らしていない、ペチャンコのパンや苦い葉っぱなどを食べなさい。そうすると、神様は、血を塗った家を通り過ぎて、血を塗っていない家は、その家の人々の中で、兄弟の内、最初に生まれた者は死ぬことになる。』

そして神様はそのとおりにしたので、エジプトの王様の子どもも死んでしまいました。そこで、王様はモーセを呼んで、ヘブライ人を自由にしてやる、と許可しました。エジプト人たちは、最初に生まれた人はみんな死んだのに、ヘブライ人たちはだれも死ぬことはありませんでした。

この後、エジプトを出て行ったヘブライ人たちをファラオの軍隊が追っかけて来ましたが、ヘブライ人たちが海を渡った後、ファラオの軍隊は、海の水に吞まれて死んでしまいました。

この出来事を記念して、ヘブライ人の子孫であるユダヤ人たちは、ニサンの月の14日の午後には、小羊を殺し、その日の夜には、過ぎ越しの食事をしているのです。

ユダヤのこよみは、太陰暦という、月の満ち欠けで日にちを数えています。

月が丸くなる満月は、15夜と言いますが、ユダヤ人の場合は、一日は日没から始まるので、14日の午後、羊を殺して、その日の夜は、もう15日です。そして満月の夜に、過ぎ越しの食事をして、神様が自分たちの先祖をエジプトの奴隷生活から解放して、自由な国民にくださったことを感謝するのです。

ところで、その出エジプトという出来事後、1300年くらい過ぎたイエス様の時代、紀元30年の4月7日は、金曜日でした。これはユダヤの暦では、ニサンの月の14日にあたります。この日、午後3時頃イエス様が十字架にかかって死にました。ちょうど、ユダヤの伝統的な祭りで、過ぎ越しの食事をするために、小羊が殺される時間でした。

イエス様が十字架で死ぬ時、弟子たちのほとんどは逃げていましたが、ゼベダイの子のヨハネは、イエス様のお母さんと一緒にゴルゴタの丘にいました。そして、死ぬ間際のイエス様から、ヨハネは「見なさい、あなたの母です。」と言われて、ヨハネはマリアさんを自分の家に引き取ることにしましたが、このヨハネには、イエス様が、この十字架の上で死のうとしている姿を見て、思い出すことがありました。イエス様と出会った時のことです。

ヨハネは元々、洗礼者ヨハネの弟子だったのです。漁師仲間のアンデレと一緒に、洗礼者ヨハネの教えを聞いていましたが、ヨルダン川で洗礼者ヨハネが洗礼を授けている時、イエス様が来られたのです。すると、洗礼者ヨハネは、弟子たちに向かって、「見よ、世の罪を取り除く神の小羊だ。」と言いました。そしてその翌日も、イエス様を指して、「見よ、神の小羊だ。」と言ったのです。

そこで、弟子のヨハネはアンデレと一緒にイエス様の弟子になったのでした。

「ああ、あの時、ヨハネ先生が言っていた、神の小羊というのは、今過ぎ越しの食事のための各家庭で殺される小羊のことだったんだ。イエス様は動物の羊ではなく、ご自分が神の小羊として、十字架で殺されることを、私たちに話してくださっていたんだ。」とヨハネは悟ったのです。

エジプトのヘブライ人は、家の入り口に塗られた、小羊の血によって、死ぬことから救われ、そして、エジプトの奴隷生活から解放されました。

それでは、神の小羊であるイエス様の血は、私たちに何を与えて下さるのでしょうか？

イエス様が、息を引き取られた時、エルサレムの神殿の垂れ幕が上から下まで真っ二つに裂けた、と福音書は書いています。この幕は、人々と神様を分ける幕であって、この幕の内側には、イスラエルの大祭司が、1年に1度だけ、入ることが許されているところなのですが、イエス様の犠牲の血によって、神様と私たちを隔てる幕が、壊されました。つまり、イエス様によって、私たちは神様の所へ行けるようになった、ということを表しているのです。

もっと言えば、イエス様が血を流して死んでくださったので、私たちは、神様から離れる、死んだような生活から、神様につながる生活に入れられた、ということでしょう。

この出来事を、歌っているのが、聖歌の168番です。

ユダヤ人が過ぎ越しの祭で祝っているのは、奴隷だったエジプトでの生活から解放されたことですが、イエス様が十字架にかかって神の小羊として死んでくださったことによって、4節の「死とよみの戸をうち破りて」と言っているように、私たちが神様からの豊かな愛の恵みを受けられるようになったことを感謝する。これが、イエス様によってもたらされる過ぎ越しの祭だ、ということなのです。

2節目の「しばらく墓に、眠れる主は、日のごと出でて、かがやき満ち、」と復活を歌った後、「罪の暗けき 冬を去らせ、光あふるる、春を来たす」と歌います。

ヨハネは、イエス様を小羊にたとえて、ヨハネの黙示録などでしばしば天地創造の父なる神様（玉座にいます方）と同等の高い地位で表現しています。

また、パウロも「いつも新しい練り粉のままでいられるように、古いパン種をきれいに取り除きなさい。現に、あなたがたはパン種の入っていない者なのです。キリストが、わたしたちの過越の小羊として屠られたからです。」と、イエス様を過越の小羊として、表現しています。

イースターという英語は、ゲルマン民族の神話に出てくる、春の女神エアストレという名前から来ています。ゲルマン民族であるドイツ人は、オースタンと呼ぶようです。英語やドイツ語を話す人々には、イースターと言えば、「春が来たなあ。」という気持ちにさせるものなのでしょう。

しかし、春を意味するイースターよりも、もっと復活日の意味を良くあらわしているのは、フランス語のパークとかギリシャ語のパスカです。これは、ユダヤ人が祝っている過ぎ越しの祭ペサハから来る言葉であって、キリスト教にとっては、単に奴隷から自由になるだけではなく、神様の恵みを受けて、命にあふれる生活へ入ることを意味しているのです。

私たちは、この過ぎ越しの祭りに、神の小羊として十字架で殺され、その血によって、私たちが自由にされ、神様の恵みを豊かに受けられるようになったことを感謝しましょう。そして、このために犠牲になったイエス様は、復活して、勝利者として、今は神様と共に天におられることをほめたたえる、イースターを祝いたいと思います。